

面白いモノ その1

ハレのかたち

菅原亮二 民博研究戦略センター

「つくりもの」とよばれる造形物は、おもしろさこそが第一義。おもしろさを競い合う、つくりものの文化の中心となってきたのは、江戸時代の大阪ともいわれる。笑いに価値をおく現代の大阪気質ともつながっているのだろうか。モノがもつおもしろさを、あらためてかんがえてみよう。

つくりものという造形物

わたしたちの日々の暮らしの場には、衣類、食器、家具から車や家屋に至るまで、かたちや構造や大きさが異なるじつにさまざまなモノが存在する。それは、わたしたちがさまざまなモノを作り出し、手に入れ、身の周りに置いて日々の暮らしを営んできたことを示している。こうした暮らしの場への対し、わたしたちは、それがいかに役に立つか、いかに便利で使い易いかといった道具としての実用性や効率性を問題にしがちである。わたしが学んできた民俗学も例外ではない。民俗学はそうしたモノを、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(滋澤敬三)と見なし、「民具」とよんで論じてきた。

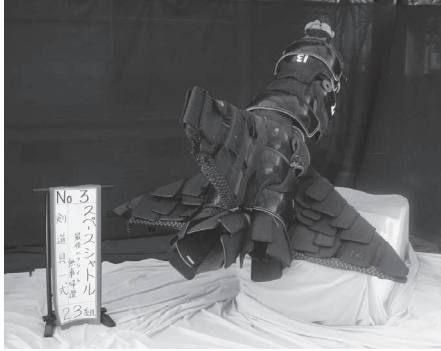
しかし、改めて考えてみると、わたしたちの暮らしの場には、実用性や効率性が必ずしも問題とされないモノも存在してきたことに気づく。例えば、祭や年中行事や人生儀礼などで見かける御幣・幟・傘・笠・仮面・燈籠・御輿・曳山といったモノである。これらは、いずれも形や色合いといった造形面にさまざまな工夫や趣向が凝らされていて、日々用いられる生活用具類とは大いに趣を異にする「ハレのかたち」とでもよべばいいだろうか。そんな

なハレのかたちの最たるモノが、武蔵大学の福原敏男氏や大阪芸大の西岡陽子氏らが「つくりもの」とよんで関心を寄せてきた造形物の一群である。

つくりものを目にするとき

各地では、祭や年中行事などの際に、地元の人びとが形や色合いなどに趣向を凝らして作り上げ、人びとの見物に供する造形物すなわちつくりものを目にする事ができる。民博がある近畿地方でも、例えば大阪府八尾市八尾木では、毎年九月下旬、町内一〇カ所程に、野菜や穀物などの農作物を用いてアニメのキャラクターやテレビ・ドラマの一場面などを作った「つくりもん」が飾られる。八尾木のつくりもんは寛政年間(一七八九〜一八〇〇)に八尾木不動尊の縁日でおこなわれたのが始まりとされる。滋賀県野洲市行畑で毎年七月におこなわれる愛宕地藏祭りでは、「調理用具一式」「竹製品一式」など同種の物品を用いてその年のニュースや人気アニメのキャラクターなどを作った「造り物」が、町内二〇カ所以上に飾られる。行畑の造り物は一七世紀半ばに地藏尊の祭の開始とともに始まり、当初は

行畑の造り物
「剣道道具一式 スペースシャトル最後のフライト無事帰還」



人びとが日々用いる農具一式で作られていたが、次第にさまざまな道具一式で作られるようになったという。

京都府福知山市夜久野町額田の一宮神社の秋祭では、野菜や野山の植物で時事的な話題や周知の物語の一場面などを作った「下だし」が町内数カ所に飾られる。額田の下だしは、百年程前に山車の上でおこなう子供歌舞伎が廃止され、そ

れに代わって野菜で合戦の様子を作ったところ好評を博したのを機に始まったものである。

京都の北野天満宮で一〇月におこなわれるずいき祭の「ずいき御輿」もつくりものの範疇に加えることができる。ずいき御輿はずいきで屋根を葺き、四方には人びとがよく知る物語の一場面などが野菜や乾物などで描かれる。これは、一七世紀初めに祭の供物の野菜や果物を用いて御輿を作ったのが始まりとされる。つくりものが出る祭や年中行事は、ほかに兵庫、岡山、広島

鳥根県出雲市直江一式飾り「歌舞伎 暫(かぶき しばらく)」

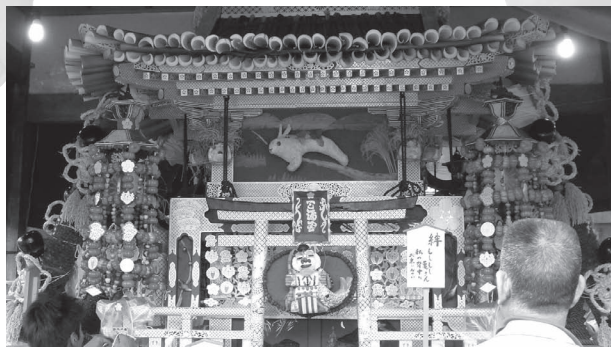


鳥取、島根、愛媛、大分、熊本など、各地でおこなわれているが、岐阜や富山を東限として西日本に限られる。こうした分布の偏りに関しては、江戸時代の大坂が、つくりものの趣向のネタ本を出版するなどつくりものの文化の中心となっていて、それが当時の大坂を起点とした物資や商品の流通とともに広まったことによると見る向きもあるが、確かなところは不明である。

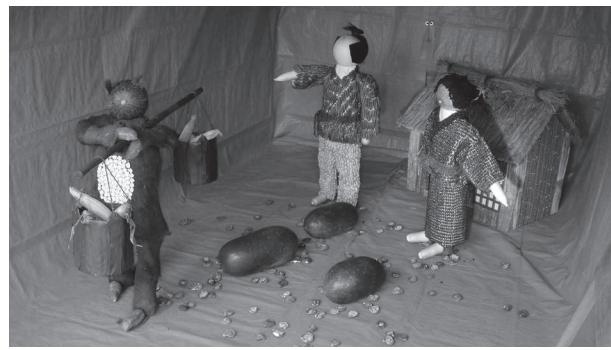
つくりものの競い合い

各地のつくりものは、用いる素材や作り方、呼称はさまざまであるにもかかわらず、類似の雰囲気や漂わせているように感じる。どこかのつくりものも、造形にことさらに趣向を凝らし、見物の関心を集めることが第一の眼目となっている。その結果、面白いつくりものが出来上がるが、もちろんすべてのつくりものが面白いわけではない。出来不出来があるし、当然、見たときに感じる面白さにも差が出る。だからこそ、どこでも作り手はより面白いモノを作ることを競い合うし、どこでも見物はそれぞれを見比べて面白さの優劣を評することになる。そうした作り手と見物双方の面白さを志向する想いや感覚が収斂するモノという点では、各地のつくりものは共通する。それが、類似の雰囲気を漂わせることに繋がっているのかも知れない。

確かにつくりものは面白い。しかもそれは、写真や常設館で見るとより祭や年中行事の現場で見たほうがはるかに面白い。それはなぜか。そのあたりに、つくりものがハレのかたちとして各地の人びとを魅了してきたわけを考える手掛かりがありそうである。



北野天満宮 ずいき御輿「絆——もしもし亀さん私の背中におのりなさい」



八尾木のつくりもん「狸と彦一」